

# 神社問題に關する世論一瞥

文學士 栗 原 廣 廓

## 一、道德上より觀たる

### 神社問題

文學博士 井 上 哲 次 郎

#### ▲神社と寺院教會との差異

先づ神社の性質に就て考ふるに、神社は佛教の寺院、基督教の會堂とは餘程其性質が違ふ、神社は國家の營造物であつて、國庫より經費を出して居る。即ち伊勢の皇大神宮と官幣社は宮内省から國幣社は内務省から、それ〴〵幣帛を出し、之れに奉仕する官司以下の神職は官吏であつて、府縣社は府縣廳に於て、鄉村社は夫れ〴〵狭き範圍内に於て設けられてある。寺院や教會は私立である

が、神社は官設の營造物である。神社は日本民族の要求に出で、國家が造つて居るものである、此點が外來の宗教とは大に違ふ。宗教と云ふ上から云へば、神社は寺院教會に當るけれども、其成り立ちが大に異なるのである。

#### ▲日本の社會に於ける神社の地位

神社の性質を明かにする上に於て先づ神社が日本の社會に於ける位置を述べんに、第一に神社は神聖なる場所である。人民崇敬の中心點となつて居る。伊勢の大廟は國民の神聖なる中心點である。其他神社の存在する所は、何處でも神聖なる場所であり、又其の地方の中心點となつて居る、日本の發展するに従ひ、北海道には札幌神社が出來、臺灣

には臺灣神社が出來ると云ふ風で、神社が神聖なる中心點となると云ふことが民族の精神を純化する上に常に效力がある。第二は神社は永く公園地の如くなつて居つて、宏壯にして景色の佳い樹木の多き所を擇んで建てられて居る。第三に神社は美術工藝の保存せらるゝ所となつて居る。第四に歴史的關係を有つて居る、祭神の關係より種々歴史上の智識を喚び出し、殊に偉人傑士を祀れる神社に在りては、歴史的聯想を喚び起すことが多い。

▲神社と我國民性

第五に國民性の粹を發揮して居る我國民性の特色は現實性、樂天性、單純性、潔白性であつて神社は此の何づれをも現はして居る、偉人傑士の靈を祀るにも、偉人傑士の靈が世に在ると云ふ信仰から祀るのであつて、幽冥所を異にすと雖も、其靈が此世に在ると信ずる我が國民の現實性が能く茲に現はれて居る、神社の結構は陽性であり、神社に用ゐらるゝ音樂も樂天的聯想を喚び起こさしむる、又た神に獻ぐる供物も陽性である、日光の建築は徳川時代であるから復雜であるが古風の神

社となると單純であつて單純なるが故に嚴肅な感じを與へ言ふべからざる莊嚴を感じしむる、又た神社には手を洗ふ場所が特に設けられてあるが如きは、潔白性を現はせるものである。此如く神社は國民性の粹を表現して居る。

▲神社と祖先崇拜

次に神社は如何なる效用を爲すがに就て一言せんに、神社の淵源は墳墓を祀りしから始つたもので、今日でも別に神殿なく、神は墳墓のみで拜殿が建つてあるのがある、之れが神社の原型である、神社は疑ひもなく祖先崇拜の思想から起つたもので祖先崇拜から一轉して國家の恩人國家の進運を助けし偉人傑士を祀るに至つたのである、祖先崇拜は神社の主なる原因であるが、自然現象を人格化して、自然現象を祖先崇拜に結び付けて居るのがある、併しなから自然神道の信仰は、智識の普及するに従ひ薄らぎ行き、下層社會に残こつて居る、祖先崇拜に就ても、個人個人の祖先崇拜は交通機關が發達して定住者が少なくなるのと、異つた信仰の這入つた事杯が原因して衰へる傾向があ

るが、偉人傑士に對する崇拜は益々盛んになる、殊に伊勢大廟の如きは、維新後參拜者が増加し國家に戰爭のある毎に、著しき増加を示し、其他九段の靖國神社、札幌神社、臺灣神社の如く、新たな形式を以て發展し、個々の祖先崇拜は衰へて行くが、國家的の祖先崇拜の中に吸込まれて行く有様である。而して偉人傑士を崇敬する機關として我國民の銅像や記念碑では満足出来ないのである。外國にも偉人傑士の崇敬はあることはあるが我が日本は餘程發達して居る、我國に於ては國民自身の要求に出で、國家が崇敬の機關を立て、偉人傑士に尊敬を捧ぐるのである。

#### ▲神社純化の必要

日本の神社に於て、自然神道に屬するのは僅少であつて、國家の恩人を祀る神々は十中八九を占めて居る、低い神社には所謂淫祠邪教と稱せらるゝものや、地方の迷信から信ずる者がある爲に、外國人杯から日本の神社を變に思はしむるのであるから、神社を選択し素性の分かつた神社ばかりにする必要がある、即ち神社の純化を圖らねばなら

ぬ。現在の自然神道の神社には、隨分如何がはしき猥褻、若くは迷信の塊りと思はるゝのがある、之は大に整理をせねばならぬ。

#### ▲神社と社會教育

偉人傑士に對する崇敬から來る純粹の神社が如何に社會教育の上に效果があるかと云ふに、過去の偉人傑士が萬衆に優れし精神の威力を現はし、日本の社會を發展せしむる原動力となりしを想ひ起こし、其の人を尊信し、其の人に對して感謝するの情は、銅像杯では満足する能はず、到底尋常の人と見る能はず神社の様に祀り度くなるのであつて、如此く崇敬する結果として、個人としては修養の一端となり偉人傑士の感化を受け、更に自己の發展の機會を作ると同時に、國家的民族的の思想を喚起するに至る、社會教育として最も適切な方法である、佛教の教祖釋迦牟尼は人間であるが、之れを信ずる人からは到底人間と見る能はず覺者と云ひ、如來と云ひ、所謂神人合一と見るので、丁度我神道に於て偉人傑士を神と祀るのと同じ意味である。弘法大師でも、日蓮上人でも、親

鸞上人でも、神道で翻譯するならば神である、基督も亦た然りで、基督でも聖徒でも、神道に翻譯すれば神に祀らるべき人である、だから佛教や基督教が我が偉人傑士を神社に祀るのを攻撃するならば、それは自分の立場を攻撃すると同様である外國には神社はないけれども、ナポレオンの墓でも、ワシトンの墓でも、之れに參詣するは、神社に參るのと形式は異なるけれども、精神は異らぬ、故に神社制度は國民に對して修養發奮の機會を與へ、國家的民族的の思想を喚發せしむる獎勵の方法として最も適切である。而して又た感情教育から云つても、基督教や佛教には夫れづゝ感情教育の途があるが、基督教も佛教も信じない人は、神社に行けば其の缺陷を満足せらるゝのみならず、祭神の明瞭なるものは、寧ろハッキリした感情を與へられる。

▲神社と宗教との關係

最後に實際問題として神社と宗教との關係に就て神社は宗教なりや否や、神社に於て祈禱、齋忌祭祀を行ふ以上は、宗教でないか、宗教なりとせ

ば、學校の兒童を神社に參詣せしむると同様に學校に他の宗教を入れてよいではないかと云ふ議論が宗教界殊に基督教の方面に起つて居るが、宗教とは何ぞやと言はゞ、神人の關係より成立つて居るのが即ち宗教で、神に對して祈禱を爲す以上神社は確に宗教である、文部省や内務省では神社は宗教にあらざると言つて居るが、宗教學から言へば宗教であると言はねばならぬ。

▲學校兒童の神社參拜

併し神社が宗教であつても學校の兒童を神社に參拜せしむるに敢へて差支がないと思ふ、何故かと云ふに歐羅巴のサンペートルの寺は、加特力教の本山であるけれども、加特力教の信者のみならず、美術家は美術を研究せんが爲めに、歴史家は歴史家の立場から、建築家は建築を觀るが爲めに宗教學者は宗教學者の立場から集つて來る、之れと同様神社も色々の方面から見られる、美術、歴史、建築、宗教、道德の各方面があるからして、假令神社に於て宗教の儀式を行ふことがあつても學校教師が兒童を神社へ引率する場合に宗教儀式

に重きを置くに及ばない、歴史上、教育上から偉人傑士の感化を説き、其高風を仰がしむれば夫れでよい譯であつて、他の建築家や宗教學者の態度とは異なるべきである、若し夫れ道徳と宗教との關係に至りては、極めて複雑であるから、哲學上の議論は今略し、道徳と宗教との二方面に於て、小學兒童の神社參拜をして道徳上教育上の方面から感化を受けしむることに注意するならば、宗教上の混淆を來たす憂へが無いと信ずる。(中外)

## 二、祖先崇拜に就いて

高島平三郎

文明は大陸より傳つて島國に留まる。島と大陸との交通が頻繁であれば、文明に共通點があるけれども、未開の時代にあつては、一旦傳はつた文明が大陸の進歩するにも拘らず、其の儘島國に留まるものである。我が國は島である爲めに、其の例に洩れず、大陸に發達したるものが、我が國に傳はり永く其の儘に留つた。併し我が國に於ては、いろ／＼形を變へ性質を更へたものが少くない。

祖先崇拜の如きも、其の意義其の性質が昔と今と同じではない。西洋人の中には、日本の祖先崇拜は、極めて程度の低い野蠻的のものであると見て居るものもある。これは一面から見れば尤もな點があるけれども他の一面を知らないものである。祖先崇拜といふものが、昔起つた儘のものなれば幼稚で野蠻的であるけれども、今日では大に進歩した。昔は祖先を神と思ひ、其の意志に背けば祟りがあるとと思つて居た。今日では祖先崇拜といふことは、祖先の恩を感謝するといふことである。昔は祖先崇拜といふことが、宗教的であつたが、今日ではそれが道徳化された。夫れ故祖先崇拜といふべきでなく、祖先崇敬といふべきである。教育社會に於ては崇拜と言はず、崇敬と言つた例もある。

神道の中には、宗教化したるものがある。これも原は祖先崇拜の單純なる思想より來たのであらうけれども、祖先を神とし、祖先は天地萬物の主宰であると思ひこれを祭るに至つた。今日に於ても尙、一神教・多神教の形式を取つて居るものが

ある。教育は國民道德を基礎とすべきは勿論であるが、祖先崇拜を教育上に採用せんには、祖先崇拜の宗教的意味と道德的意味とを區別して置かねばならぬ。伊勢の皇太神宮は、宗教の對象となつて居るが、これを神として祭らないからと言つて非國民であるといふことは出来ぬ。信教の自由は憲法に於て許されて居る。然れども國民の祖先で尊敬することは、國民としての情であり、又國民の團結を堅くするといふ點に於て必要なことである。これに對して基督教徒又は佛教徒の非難するものあるは心得ぬことである。

先年來屢起つた問題である、學校教員が生徒を連れて、神社に參拜した。これに對して基督教の父兄が抗議を申込んだ。これは父兄が宗教としての祖先崇拜と道德としての祖先崇拜との區別を無視して居るのであるが、神官や校長も亦かゝる區別を明かにせず、宗教としての神道、祖先崇拜としての神道を同一に見做し、同一の形式を取らすことより來て居ると思ふ。で吾々が徹頭徹尾採用

すべきは、祖先に對する感謝の念である。吾々に對して基礎を開いて呉れた恩義に對して、其の後の國民である吾々が一層發展して行くといふことである。祖先に對する尊敬・感謝・報恩、尙一層積極的に祖先の意志を繼いで將來の大發展を計るといふことが、祖先崇拜の眞の意義である。

近來我國民が自覺して、自國の歴史を調べ、自國の思想を探究して、古神道を研究するものあり、新らしき意味に於て神代の思想を發揮せんとするものあるは、實に喜ばしいことである。又これ等のことより、明治維新以來忽にせられて居た老人を尊敬すること、先輩を尊ぶことが漸次恢復せられつつあるは喜ばしいことである。併し利のある處必ず弊ありで、祖先崇拜或は老人及先輩の尊敬も亦弊害を伴ふ。而かも國家將來の發展に關係するものがある。大に注意しなければならぬ。予は常に思ふ。世界の國民に望前的と同顧的とがある。理想を未來に置き、古代よりも現代よりも將來を重んじ、過去に於て未だ發達しなかつたことを發達せしめ、よくなかつたことを改良して行かんとするは、望

前的國民である。斯の如き國民は動もすれば、祖先を顧みず祖先を卑しむ傾向がある。歐洲の智識の低い國民即ち勞働者には、此弊に陥つて居るものがある。之に反して回顧的國民は古代を理想とし、古代を以て現在に優つて居るものとなし、凡て之に則らんとして居る。古來の支那國民の如きは即ちこれで、彼等は口を開けば、文武周公を稱し、世が澆季になつたと云ふのは、彼等の口癖である、支那國民が斯の如くなつたのは、民族の特性かも知れぬが、あまりに祖先を讚美することに因はれた思想が原因をなして居ると思ふ。我が國の祖先崇拜もかゝる弊に陥りたくないものである。我が國民は立派な共同の祖先を有して居る。我が家は光輝ある位置高さ祖先を有して居ると、徒に古代の祖先を誇りて、現代の自己の發展を忘れるやうなことがあつては由々數大事である。今日に於ても地方僻陬の地にはこれに類似の事實が少くはない。この地方に於ける舊家といふものは、家の格式血統の正しきを誇りて、何等爲すことなく家運遂に振はずといふ悲境に陥つて居るものがあ

る。其の家に使はれて居た者、昔で言へば、家の子郎等といふべき者が進歩發展するにも拘らず、主人たるものは徒に氣位のみ高くして何事もなさないといふは屢見る處である。

祖先に感謝し祖先に報恩することは、人間の性情として極めて美しきことであつて、如何なる宗教を信ずる人も、如何なる境遇にある人も爲すべきことである。我が國が一つの家族よりして遂に大なる國家を爲したることは、人類學及社會學に於ても、他に其の類例を見ざる所である。これを見ても祖先に感謝し、祖先の恩に報ゆるといふ意味に於て、祖先を崇拜するといふことは結構なことである。併し祖先を崇拜するのあまり、祖先以上のことは出来ないと思つて居るのは意氣地のないことである。宗教家には、往々かういふ考を有つて居る者がある。例へば釋迦・基督下つては空海・親鸞・日蓮を崇拜するのあまり、彼等を人間以上の者となし、之に及ぶことは出来ないものであると信じて居る。宗教上からの可否は暫らく措き、國民教育の上より見れば、かゝる思想は大に不可

なることである。歐洲に於ては、學者、自分の師と仰ぐ學者に對しても、決して其の説に盲從するといふことはなく、これを批評してこれを發展せしめ、師説以上のことを唱へ、師説以外のことを發見して、常に新しい道を開いて行く、これに反して東洋に於ては、學術研究のことまでも、先輩及師を尊敬することゝ混同し、師説以外に出ることを師に背くとなし、師を尊ぶ所以でないとなし、人格尊敬と學術尊重、禮儀と攻究とを同一視して居る。このことは大正國民の最もよく辨別して置かねばならぬ點である。これと相聯關して國民道徳にも注意を拂はねばならぬ點がある。昔の人が爲したことにして吾々の守らなければならぬことは多いが、昔の人の爲したことでも今日の時勢に合はぬことは改良して行かねばならぬこともあるし、又昔の人の爲さなかつたことで吾々の爲すべきことの多いことを忘れてはならぬ。又教育者其の他の一部の人に重きを措かれて居る武士道もこれに聯關して注意すべき點がある。余も武士の家に生れ、幼時これによりて教育せられた。武

士道を尊ぶといふ點に於ては、余は決して人後に立つものではないが、これを昔の儘に於て説くといふことは考へねばならぬことであると思ふ。今は武士も居らず、諸侯との關係もない。夫故武士道の精神を取つて、今日の世に應用して行くことはよいことであるけれども、昔其の儘の武士道を説いたからとて決して人を動さない。國民の大多數は、武士道を骨子としたる劇や小説を見て泣くことがある。併しこれが必しも道徳的感情にうたれたといふでもない。又時に劇中の人物のすることを馬鹿げたことゝして冷笑することもある。然れども其の人を惡人と非難することも出来ない。劇或ひは小説中の人物と我等とは時代を異にして居る。境遇を異にして居る。生活上共通の點が少ないのである。封建時代に於ては、武士道は日本の誇とする所であつた。今日の日本は立憲國である。立憲國には立憲國として、其の光を輝かす道徳がなければならぬ。立憲國としての道徳を建て、之を實行することが、祖先崇拜と相背かざるのみならず、斯くすることが祖先の意志を實行する譯

で、眞の意義に於ける祖先崇拜である。徒に神社の前に立つて手を拍き頭を下げることのみが祖先崇拜ではない。けれども教育に於ては普及を計るから、形式に流れることは免れない。例へば氏神は、其の地の祖先其の地に於ける恩人を祭つてあるものであるが、この祖先或は恩人に感謝の念を表さんことを一般に命令或は獎勵する時は、拍手並に頭を下げるといふ形式を取らしむることは免れないことである。けれども教育者たる者は、大正の新時代に起つた眞の精神を把捉しこれを貫徹せしむることを忘れてはならぬ。余は元來神社を紀念物とするものである。之を西洋のに比較すれば、神社は西洋に於ける銅像である。銅像は其の人の功績を偲び、其の人を尊敬し、長く其の人を忘れざらしめんが爲めのものである。我が國の神社はそれと形を異にして居るけれども其の意味は同じである。一般兒童にこの旨を感得せしむることは教育上最も必要なことである。

吾人は我が國民殊に兒童及青年に祖先崇拜の眞の意義を知らしめて、之によりて將來を進めて行

くの心掛を待たしめねばならぬと思ふ。かゝる意味の祖先崇拜は、野蠻時代の遺風ではなく大正の我が國に最も適はしき所のものである。前にも述べたるが如く西洋人が我が國の祖先崇拜を見て野蠻時代の遺風としたるは日本人の内面生活を知らず只外形のみを觀察したる結果であると思ふ。

(教育學衛界)

### 三、國家觀念と教育

文學士 大島 正徳

國民教育の大精神として、教育勅語によるべきことは明かなことであるけれども、之れについて具體的に其の今後に處すべき要點を明かにする爲めに、余は人格主義を主張し其の基礎の上に立つて國家觀念を養成しなければならぬといふことを述べたのであるが、從來能く耳にすることは、祖先崇拜であるとか、又は家族主義であるとかいふものは、實に教育の精神的基礎であるとまで唱道されて居るのであるが果してこれも自覺的に唱道されて居るのならばよいが、唯々通り文句のやう

な空虚な叫びが流行して居るやうであるのに對しては、余は大に反省すべきことがあらうと思ふのである。

日本が國家として一家の觀念を尊重し、又日本が光輝ある歴史ある觀念を、又我が國民は特に祖先を思慕し、父母を敬愛する精神に強いといふことを明かにし、此の點を小國民の念頭に注意させるのはよいが、唯々譯もなく、即ち個人の人格的自覺に基づかせずして、唯々神社であるとか、祖先であるとかを崇拜させて、是れが家族主義の鼓吹であるなどといつても一向通らない話ではないか。假りに全然此等のものには服従しなければならぬ筈のものであるとしても、實際上に於ては、其のまゝには、中々實行が出来ないのである。よく人が従來の家族主義、祖先崇拜主義と、日本今後の海外發展主義とは矛盾して居るといふことを聞くのであるが、たゞに此の點に於て故障あるのみが今日の國家組織又は社會組織からいふと、謂はゆる祖先崇拜主義であらうが、家族主義であるとか、又は神社崇敬であるとかいふものを破壊し

つゝある傾向のあるのは明かな事實である。即ちそれ等の主義が、日本國民の唯一の原則であるとしても、實に今日のやうな状態を以てしては、到底余は實行は出来ないことと思ふ。即ち今日の社會組織、行政組織は、此等の觀念に大なる妨害を與へ、破壊を與へて居るのである。故に此の點に於て國民の適歸する所を定めるのは、誠に心細い譯であつて、是れは何うしても深く個人の人格、自覺に基づいた國家觀念を打ち立てなければならぬのである。論者が常にいふが如く、現代の産業主義、商工業組織は、實際能く家族主義を破壊しつつあるのである。家であるとか、土着の精神であるとかいふものを毀損しつつあるものでありといふことは、此處に改めていふの必要もないのであるが、是れはたゞに殖産工業の方面のみに限らないのである。或は官吏であるとか、教員であるとか、又は學生であるとかいふやうなものも、亦實に此の家の觀念、家族の觀念、又郷土を愛する觀念を殺ぎつつあるのである。而して是れは實に今日の國家、社會の狀態が、之をして然らしむる

のであるといつて差支ないのである。例へば官吏の任免、轉任の如きは、絶えず變化して居るのであつて、或は甲の町から乙の村に引移るが爲めに、何うしても此處に一定の家の觀念、一定の土地の觀念の出來やう筈もなく、いはゞ高等の放浪生活をして居るものといつてもよいのである。軍人の如きも亦然りであつて其の家は常に一定せず、家族的同居も亦困難であり、親子別々に生活するといふ有様であつて見れば、何うしても此處に一定の家、一定の土地に關して親密な觀念の出來よう筈はない譯である。而已ならず、特に自ら家族主義、祖先崇拜の觀念を養成する地位にある教員自身といへども、亦實に自ら此の家族主義、祖先の墳墓の地を確守して居ることは出來なくなつて居るのである。即ち此等の者といへども亦能く一片の辭令を以て所々方々に轉々しなればならぬのである。此の如くにして場合によつては親子、兄弟四方に離散し、勿論先祖傳來の墳墓も、確實にはお守をして行くことが出來ないといふ憐れな生活をしなければならぬやうになるのである。

學生また此の通りであつて、彼等は親しみ多き父兄の膝下に於て勉強することが出來ず、常に諸方に散亂して、其の少青年の時代よりして、早く已に家の觀念、祖先の觀念又愛郷の觀念を薄弱ならしめつゝあるのであるが、今日の國家社會の狀態に於ては、誠に已むを得ないことであるといはなければならぬ。

此の如く現代人の生活は、殆んど完全な家をして生活せず、實の祖先の如きは、固より問ふ所にあらずといふやうな狀態であり、特に農村生活の困難と同時に、皆都會生活を望み、都會の繁昌を來たし、此處にいよゝ浮草のやうな生活をしなければならぬやうな狀態にあるのである。

思ふに謂はゆる家族の觀念の如きは、たゞ謂はゆる觀念の上のことではなくて、それが實に人間の心情に訴へなければならぬものであるとしたならば、それは必ずや自己の祖先、自己の住みなれた家、又其の郷土と是非相伴つて行かなければならぬ筈である。然るに實際はといふと、總べて引越の借家住ひであつて、眞に情緒的に家の觀念を

持つて居ない、祖先の墳墓の如きは、極く稀れに見舞ふといふ今日の状態に於ては、此等の家族主義、祖先崇拜主義といふものは、今日の國家社會の組織から、終始破壊されつゝあるものであるといはなければならぬ。而して一度此等の點を考へて見るといふと、唯々昔は昔はといつて、過去をのみ顧みて、月並式に立論し、而して國民の國家的精神を強固ならしめやうとしても、それは、誠に出来ない相談であるといはなければならぬ。吾々は何處までも現代の時勢に鑑み、將來の趨勢をも洞察することを忘れずして、何處までも人格的基礎の上に國家觀念を打ち立てなければならぬことゝ信ずるのである。(小學校)

#### 四、現代思想と神社問題

文學博士 加藤 玄智

明治時代の佛教は、學術研究の思潮に動かされて歴史的研究となり、哲學的研究が盛んになつたが、佛教家自身の思想が批評的になり、眞面目なる信念が稀薄に赴き、其宗旨の信仰を以て自ら許

し、精神界に活動する人間が少なくなり、その影響として各宗の教育も傳道も寺院生活も、外形は兎も角内面に於て荒みつゝあるは覆ふべからざる事實のやうである、而して此の佛教界に吹き荒んだ實證的或は積極主義と稱せらるゝ現代思想は更らに大正に入りて神道界に向つて其の鋒鋦を現はさんとしつゝあることは注意すべきことである、現代吾國教育界を支配して居る思想も此の積極主義の思想であり、又た一般學者の多數も此の思想の傾向を有して居つて、佛教に對して試みしが如く、神社神道に對して批判を試みんとしつゝあるのである、我國の神社を以て國家の進運に貢獻せる偉人傑士を尊敬し記念せんが爲めの銅像又は記念碑と同様であつて神靈を認めて信念又は信神と云ふことから切り放して考へんとする風潮の如き之れが一影響と見るが出来る、小學校教師が兒童を引率して神社に參拜して居るが、教師自身の思想が果して政府の要求する所に一致契合して居るかどうかと云ふことも考ふべき問題である、而して神社は宗教にあらずと云ふ政府の見解が正鵠を

得て居るか、又た神社は宗教にあらざるが故に銅像や記念碑と全く同一なりとする考へ方も果して正しき見解と云ひ得べきかどうか、大正の思想界としても又た宗教界としても此神社問題は頗る重大なる問題である、佛教は曩きに云ふ如く現代思想の影響を被ふて信念を冷却せしめられ、佛教の本領を荒されたのであるが、吾人は神社問題に對して般鑑遠からずと杞憂を懐かなくてもよいかどうか國民としても研究者としても此點に對して充分の注意を拂はねばならぬことと思ふ、固陋なる見解に囚はれたり、曲學阿世的態度を弄することの不可なると同時に、國民思想に重大なる關係あり、牽ひて我國體に影響を有する問題であることを顧慮せずして理性の批判のみに訴へて自ら快とするやうな無責任に陥つてはならぬ、何處までも慎重なる考慮を廻らして進まねばならぬこと、信ずる。(中外)

## 五、神社は日本魂の源泉なり

賀 茂 百 樹

### 一 伊勢皇太神宮と靖國神社

官幣を捧げらるゝ神社、國幣を獻らるゝ神社は云ふ迄も無く、日本全國到る處の大小神社は、擧げて、光輝ある日本魂の據て起るの源泉である。即ち、山村漁邑の、小さい鎮守の杜からでも、二六時中、已む時無く、滾々として、國民の元氣たるべき日本魂が流れ出で、以て、村民の腦裡に深く注ぎ入りつゝある。全國數萬の神社中には、如何はしいと思はるゝものも無いではないが、苟くも淫祀叢社でない限り、假令如何なる小社なりとも、實に清冽なる源泉となつて、其處より、日本魂が送り出つゝあるのである。而して、私は、敢て茲に

伊勢皇太神宮は、その大源泉にましまし、

靖國神社は、その一大淵藪である、

と斷言するのである。

### 二 神社の有する崇高なる意義

私は、斯くの如く信じて居る。否、事實が斯くの如くなのである。併し、氏神の例祭に、村の若者共が、樽神輿を昇ぎ雄々しい活氣ある狀して練

り歩くのを見たり、又數百千の人々が、物見かた  
く陸續參拜する状を見たりして、そう云ふので  
はない。それかと云ふて、壯嚴なる社殿を仰ぎ、  
閑雅なる神苑に逍遙して、爲めに感憤する人あり  
と云ふのでも無い。尤もかゝる事も、多少は、日  
本魂を涵養するの源因となつて居るでもあらう。  
かの血しほに染まれるやうな秋の紅葉でも、天女  
の輕羅を遠きに望むやうな春の櫻花でも、見様に  
よりては、日本魂を喚起する資料たるのである。  
併し、斯る皮相上の見解を以てしては、神社も、  
銅像も、記念碑も、竟に異なる點が見出されぬ。  
私は、そう云ふ淺薄に考へて、敢て『神社は日本  
魂の源泉なり』と呼ぶ者では無い。

そもく我國の神社は、我が建國の大本、我皇  
室國民の由來を談て居るところのもので、加ふる  
に、國民の純忠至誠の念を表現して居るところで  
ある。而して、斯く言ふ所以は、神社建設の原因  
だに之れを索ぬれば、直ちに、分明的のである。

### 三 神社建設の原因

太古、大祖伊弉諾尊、御頭玉を、皇祖天照大神

に賜ふや、大神は、之れを、御倉舉板之神として  
孝敬の道を盡したまはれたのである。又た、皇祖  
天照大神は、御手に寶鏡を持たして、皇孫に『視  
此寶鏡猶視吾、同殿共床以爲齋鏡』と詔り給  
ひ、斯くて歷代の天子、如在の禮を以て敬祭した  
まはれたのである。而して、是れ、やがて我が國  
民性となり、以て『報本反始』『祖先崇拜』の念、彌  
々敦く、以て、神宮神社の因て起る所以となつた。  
更に、天孫降臨に際し、高皇產靈尊は、左の神  
勅を下したまはれたのである。

『吾則起<sub>ニ</sub>樹天津神籬及神津磐境<sub>ニ</sub>當爲<sub>ニ</sub>吾孫<sub>ニ</sub>奉  
齋矣汝天兒屋命太玉命宜持<sub>ニ</sub>天津神籬<sub>ニ</sub>降<sub>ニ</sub>於  
葦原中國<sub>ニ</sub>亦爲<sub>ニ</sub>吾孫<sub>ニ</sub>奉齋焉』

實に、前の『齋鏡の神詔』と、此の『神籬の神勅』  
とは、賢所となり、神祇官八神殿となり、以て、  
神宮神社建設の二大原因となり。加ふるに、我が  
國民の特性たる『忠』『孝』の基礎ともなつて居る。

### 四 『齋鏡の神詔』『神籬の神勅』

由來、齋鏡の神勅は、皇祖天照大神が、皇孫と  
永訣の時、天祖伊弉諾尊の神意を受け、人倫上『孝

『道』の斷じて忽諸に附す可からざるものなることを教へたまはれたのである。而して、神籙の神勅は、高皇産靈尊が臣民として『誠忠』の、最も重んずべきものなることを訓へたまはれたので、即ち『忠』と『孝』とは我が建國の大本となつて居る。

謹みて、高皇産靈尊の大御心のほどを、この天津神籙の神勅によりて忖度しまつるに——『人力の及ばざる所は、靈力に倚頼せねばならぬ。皇孫の御爲めには、形而上防衛守護の方、至れり盡せりと雖ども、至誠の發動によりて起る所の天佑に待たざる可からず』として、尊は、ヤシロを造りて天津神籙を樹て、親く齋主となり給ひて神靈を奉齋し、以て永く皇孫の玉體の平安にして、皇祚の天地と動くこと無く、日月と變ること無く、その天下を統御したまふこと、まさに皇太神の神勅の如く天壤無窮なることを祈請せられ、二神をして親しく此の聖儀を參列拜觀せしめ、皇孫、天降りたまふや、此の神詔を齎しめたまひ、皇祚の爲めに、至誠以て天祐を顯現すべきことを嚴勅したまへるのである。

斯くて、二神の子孫たる、中臣、忌部の兩氏は、よく此の神勅を體現し、即ち、神と君との『中執臣』として、専ら祭祀の職に従ひ、神祇官又は神宮神社に奉仕して、皇室國家の平安を祈つたのである。

##### 五 神社の意義

全國の神宮神社は、如上の精神を以て造營せられ、而して其の祭典、亦た如上の精神を以て、行はるゝのである。而して、神社に於て、皇室國家の平安を祈念することは、大正三年三月内務省令第四號の祝詞によりても明瞭である。

要するに、『忠』『孝』は、我が國民性となり。國民擧りて、皇室國家に事あれば、即ち神社に詣で、其平安を祈請するの風を馴致せる事實は、歴史に傳説に、宇として拔くべからざる根據を有して居る。實に國民は、自己の力、能ふ限り其義務に盡瘁し、而して尙ほ及ばざるものあるや、即ち之れを神靈に訴へ、以て皇室國家の平安と繁榮とを期するのである。嗚呼是れ、忠の極ではあるまいか。有史以來瑕瑾無き大日本帝國を、東海の一方に建

て得たるもの、亦た大なる理由と根據とがあることが分るであらう。乃ち私が敢て

神社は國民忠孝精神の結晶なり、

と斷言するも、何らの不可はあるまい。而して『忠孝の發動』は、取りも直さず、『日本魂』である。果して然らば

神社は日本魂の源泉なり

と確言するも、亦た何らの不可は無い筈である。實に、日本魂は、二六時中、小さき鎮守の杜からでも、發傳流動しつゝある。若し夫れ、神社に詣で、至誠を捧げ孝敬の道を奏し、以て、皇室の安泰、國家の平穩を祈請するところの、純良なる人々の胸の中には、日本魂や、彌が上にも壯烈強熾を加へられつゝあるのである。

## 六 伊勢大神宮

伊勢大神宮の、『惟祖惟宗尊無二』なることは、かの忌部廣成宿彌の言を引用するまでも無い。古來、神宮は、皇朝廷に對して神朝廷と稱して居り、實に天下數萬の神社の上に超出したる大神宮である。國家精神の中樞として、富岳の如く高く仰が

れたまひ、忠孝の發動たる日本魂の淵源となり、永劫末代に亙りて、日本民族の精神間に、無限に感孚しつゝ有る。私が、敢て

皇太神宮は、日本魂の大源泉なり

と云ふもの、何人も首肯するところであらう。

## 七 靖國神社

靖國神社の祭神は、皇室國家の御爲めに、人間として享有したる一切のものを犠牲とし、實に體力の有らむ限り、氣力の有らむ限り、其の最良の手段を盡し、而して其の最後に於てや、或は肉彈となり、或は肉楯となり、其の任務に従ひて或は海に、或は陸に、大忠を大成し、勇みて幽冥に入り、堅く護國の神たらんことを期せる、十二萬有餘の忠臣義士の靈である。

斯く、至壯至烈に發揮せられたる國民性の、茲に集注し、茲に結晶したる一大淵潢たる靖國神社は、更に又た、日本魂の源泉と成り、以て永遠に、續いて來たるべき國民性を作りつゝある。是れ譬へば恰も、湛然たる琵琶湖の水が、流れ來たつて此に集まり、再び流れ出で、水源となれるやう

なものである。是れ、私が、敢て

靖國神社は、日本魂の一大淵藪なり

と稱する所以で。是れ、國家國民に取りて、眞に  
光榮ある神社である。(「日本魂」)

## アームストロング氏著

### 「日本儒教の研究」を評す

姊崎正治

更に言はねばならぬ事は、之が爲に著者は、その研究の目的と正反對に走つたといふ事でありませぬ。著者は此の書の始めに、此の著者の目的は、西歐人に日本人を了解せしめむが爲なりと言つて

教の工夫存養を説いた精神修養及心的活動の方面を見て居りませぬ。それ故に、かゝる結論を與へたのは、著者の偏見の然らしめた所で、儒教の缺點ではありませぬ。

をります。これは頗る結構ですが、著者は次の様な結論に達してをります。『儒教の道德的理想は、文字上表面上は如何にも立派な道德書であるが、その精神に於ては缺くる處がある。…即儒教は、少しも生命を鼓吹する事なく、又生命を與へる事もしない。儒教に限らず、斯かる種類の道德は皆そうである。』と言つてをります。かくの如く、著者は儒教の哲學的見解や倫理學説のみを見て、儒

又著者は、次の問題を考へたかどうかといふ疑が生じます。即『彼等儒者は、單に文字を教へる爲の師匠であつたか、それとも、其の時代の道德生活の上に、實際上の影響を與へたかどうか』といふ問題であります。これは何人にも浮んで來る疑であります。著者は、彼等儒者の生涯や學説に就て多くの説明をなし、最後には更に此等儒學の諸派に關して、一般的説明をなさむ爲に、三章を